

音楽科における道徳性の育成に関する一考察

著者	小林 多津子
雑誌名	京都ノートルダム女子大学研究紀要
号	44
ページ	25-36
発行年	2014-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1057/00000168/

音楽科における道徳性の育成に関する一考察

A Study about the Nurture of Morality in Music Education

小 林 多 津 子

KOBAYASHI Tazuko

1 はじめに

いじめによる生徒の自殺、指導者による体罰等の問題がクローズアップされ、再度、学校における教育のあり方が大きく問われ始めた。規範意識や公共心、思いやりや責任感など、家庭や社会で生活を営む上で重要な資質が欠如しているということも大きな要因であり、これは学校教育だけの問題であるとも考えられないのである。

「新たな枠組みによって教科化し、人間の強さ・弱さを見つめながら、理性によって自らをコントロールし、よりよく生きるための基盤となる力を育てること」を求め、第2次安倍内閣の教育再生会議は2013年2月末に道徳教育の教科化を提言した。道徳を教科にしようとしている背景には、上記の問題に端を発していると考えられるが、学習することによって、理性を培い、自らをコントロールし、いじめ問題が解決するとはとても思えない。

道徳の教科化についてはさまざまな議論がある。しかし教科にする前に、根本的には教科とは何かということを改めて問い直す必要がある。道徳教育の持っている意味合いから考えれば、教科としての位置付けができるのだろうか、また教科化する意味はどこにあるのだろうか。それは教科化を目指す大きな理由の「いじめ・体罰の防止」につながるのだろうかと考えるのは筆者だけであろうか。

教育基本法（2006）は、「教育は人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」と教育の目的を規定し、その目標には「豊かな情操と道徳心、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力、公共の精神、社会の形成に参画する態度、生命及び自然を尊重する精神、伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と掲げている。

中央教育審議会は平成20年1月、「知識基盤社会」といわれているこれからの社会を生き抜くために「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」の答申を行い、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、豊かな心や健やかな身体の育成のための指導の充実等を示した。

それを受けて平成20年3月に改訂された学習指導要領の道徳教育は、道徳の時間の役割を「道

徳の時間を要として学校教育活動全体を通じて行うもの」とし、学校や学年の段階に応じ、発達的な課題に則した適切な指導を進める必要性として、「人間関係を深めること」「家庭や地域社会との連携」「豊かな体験活動の充実」を示し、自己の生き方についての考えを深め、児童生徒が健全な自信を持ち豊かな関わり合いの中で自立心を育み、自律的に生きようとするものの大切さを述べている。

押谷(2013)は、「教育の本質論から見て、道德性をしっかりした教育で培っていかなければ、子ども育たないし、国が減ぶ。教育基本法では教育の目的に『人格の完成』をうたっている。人格の完成は何かと言われれば、教育の目標に掲げられている各号の通り、道德性の育成によって成り立つ。それを身につけるための道德教育はすべて教育の根幹にあるものである。」と述べている。

そこで、本研究は道德教育の教科化が浮かび上がっている中、道德教育は学校教育活動全体で行うものであるという教育課程編成の一般方針に基づき、とりわけ1教科である音楽科が感受性や創造性の育成という大きな役割を担っているという認識に立ち、音楽科教育における道德性の育成という観点で教科教育の在り方を考察するものである。

2 道德教育

「学校における道德教育は、道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道德の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」と平成20年3月告示の小学校・中学校学習指導要領第1章総則 第1 教育課程編成の一般方針の2に示されている。

また、その目標は「道德教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を開く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道德性を養うこと。」と示されている。

すなわち、学校における道德教育は、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、郷土を愛し、個性豊かな文化を創造し、公共の精神を尊び、社会、国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と環境の保全に貢献する主体性のある日本人を育成するというものである。要するに、人間としての生き方の自覚を促し、道德性の育成をねらいとする教育活動であり、社会の変化に主体的に対応して生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割を持っているのである。

道德教育が意図していることは、人間としてよりよく生きていく力であり、一人ひとりの児

童・生徒が道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、将来出会うであろうさまざまな場面や状況においても道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質の育成であると考えている。

児童・生徒一人ひとりが自己の内なる問題に気づき、「私はどうしてあのようなことをしたのか」とか、「あれでよかったのだろうか」などと内省し、「本当はどうすべきだったのか」などと、問題意識を抱き、そのことを的確に判断し、行動する力を身につけさせることなのである。

学習指導要領によると、道徳教育の内容は児童・生徒の道徳性を①主として自分自身に関すること、②主として他の人とのかかわりに関すること、③主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること、④主として集団や社会とのかかわりに関することの4つの視点からとらえている。それぞれの視点には、内容の基本的な性格が具体的に示されている。(表1 参照)

表1 道徳の内容（内容の基本的性格）

	道徳教育の視点	内 容
1	主として自分自身に関すること	自己の在り方を自分自身とのかかわりにおいてとらえ、望ましい自己の形成を図ることに関するもの
2	主として他の人とのかかわりに関すること	自己を他の人とのかかわりの中でとらえ、望ましい人間関係の育成を図ることに関するもの
3	主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	自己を自然や美しいもの、崇高なものとのかかわりにおいてとらえ、人間としての自覚を深めることに関するもの
4	主として集団や社会とのかかわりに関すること	自己をさまざまな社会集団や郷土、国家、国際社会とのかかわりの中でとらえ、国際社会に生きる日本人としての自覚に立ち、平和的で文化的な社会及び国家の成員として必要な道徳性の育成を図ることに関するもの

(平成20年改訂 学習指導要領より)

それは、人間が人とのかかわりの中で生き、そのかかわりの中で道徳性を身につけ、人格を形成していくという視点に立って、児童・生徒の発達の特質に応じて内容構成をしている。そしてそれぞれの視点に関して、小学校の6年間及び中学校の3年間で視野に入れ、児童生徒の道徳的心情の発達、道徳的価値を認識できる能力の程度や社会認識の広がり、生活技術習熟度及び発達の段階などを考慮し、指導の適時性のある内容項目を学年段階ごとに精選し、そのことを重点的に示している。

道徳性とは、人間としての本来的なあり方やよりよい生き方をめざしてなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものであると学習指導要領に示されている。それはまた人間らしいよさであり、道徳的諸価値が一人ひとりの内面において統合されたものであるという。そして、個人の生き方のみならず、人間のあらゆる文化的活動や社会生活を根底で支えているもので、人間として共によりよく生きていく上で最も大切にしなければならないものであるとしている。

児童・生徒はさまざまな体験を通して人間の生き方・あり方を学び、持って生まれた資質能

力を開花させ、新たな自分を形成していくのである。すなわち人間の生き方やあり方の基盤となる道徳性は、生まれながらにして身につけているものではなく、社会的環境の中で獲得した価値観、いわゆる道徳的諸価値によって身につけていくのである。

一方それは現代社会における科学技術の発展や情報化、少子・高齢化、核家族化等の社会の急激な変化に大きく影響されるという側面も持っている。価値観がその時代、時代によって変化する、作られるものであるとするならば、またそれがその時々々の権力者によって形成されるものになるとしたら、人間の生き方・あり方に大きな影響を及ぼし、社会全体に非常な混乱を招くことにもなりかねない。

しかし人間としての生き方・あり方はどんなに時代が変わろうとも、大きく変わるものではなく、不易であるといえるであろう。そして、いつの時代においても、人間が幸せに生きていくために必要な力こそが道徳性であり、価値観ではないだろうか。道徳的価値というものとは心身の調和のとれた人間形成を目指すことであり、人間が生きている限りにおいて恒久的なものであると筆者は考えているのである。道徳教育とはこのようなねらいをもった教育といえる。

3 音楽科教育

道徳教育の重要性がクローズアップされ、道徳教育は教科と密接なつながりを持って行われているが、村田(2011)は、「教科指導によって培われた知性、文化的諸能力の裏付けがなかったならば、真の道徳的行為や態度とはなりえない。そして各教科の指導をすべて道徳的基盤の上に置くことが意図されなければならない。(p41)」という。

音楽科学習指導要領には、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力培い、豊かな情操を養う。(小学校)」「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。(中学校)」「音楽の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と能力を伸ばす。(高等学校音楽Ⅰ)」という目標が掲げられている。

そこには小学校、中学校、高等学校を通して、音楽活動における基礎的な能力を培わせることはもちろんのこと、「音楽を愛好する心情の育成」「音楽に対する感性の育成」「豊かな情操の育成」が目標として位置づけられているのである。

「音楽を愛好する心情」は、生涯にわたって音楽を愛好し、親しみ、生活の中に音楽を生かそうとする態度であり、「感性の育成」は、美しいものや崇高なものに感動する心を育ませることであり、「豊かな情操」とは、美に限らず、善なるものや崇高なものに対し受容し、豊かな心を育むための基盤となるものである。

また、道徳教育と各教科等の目標、内容及び教材とのかかわりの中では、音楽を愛好する心情や音楽に対する感性は、美しいものや崇高なものを尊重することにつながり、音楽による豊

かな情操は道徳性の基盤を養うものであると示されている。

「歌唱」や「器楽」の学習活動においては、上手に歌えるとか、上手に演奏できるといった技術の習得に重点が置かれるという場面が日常的によくみられる。しかし、音楽科教育は、技術の習得だけではない。もちろん知識の習得だけでもない。学習活動を通して習得する豊かな知識や高度な技術は、生活と行動のレベルを高め、心豊かな人間の育成を目指す手段であると考えることができるのである。

また音楽科教育は、音楽的諸能力の育成はもとより、音楽と生活とのかかわりに関心を持って、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむことを重視する教科でもある。音楽は、1人でもできるし多人数でもできるものである。音楽科では合唱や合奏といった学習活動があるが、これらの学習活動は児童・生徒の自覚や責任感はもちろんのこと、協調性や共感性も求められてくる。1つの作品を作り上げるためには、まず自分自身が重要な役割を果たす存在であることを自覚し、さらに人と人とのかかわりを通して培われる協調性や共感性も重視される。自分ひとりぐらいという考え方を持っていると、合唱や、合奏を伴っている音楽は作りあげることはできなくなるのである。

さらに学習教材、とりわけ歌唱教材には、自然の美しさや、崇高なものを表現した歌詞のついた旋律の美しい、どこか叙情的なメロディーを伴った楽曲が多く選曲されている。また国際社会に生きる日本人として、我が国の音楽文化に愛着を持つわらべ歌や民謡などの伝統的な音楽や、他国の音楽文化を尊重する態度を養うというねらいのもとに、さまざまな世界の音楽も選曲されている。それらを教材として行われる音楽科の学習活動が、先ほど述べた道徳教育の内容の①～④（表1）に深くかかわっていると筆者は考えるのである。

要するに音楽科教育の目指すものは、音楽活動における基礎的な能力を培わせることはもちろんのこと、生涯にわたり音楽を愛好し、美しいもの、崇高なものに感動する心を育て、豊かな心を育くませることである。これらのことは道徳教育の目標にも通じるものであり、道徳性の育成に深く関わっているといっても過言ではない。

4 音楽科の教材から読み取る道徳性について

心の作用とよくいわれているが、これはどちらかといえば知性というよりも情意的なものであると筆者は考えている。このことは、音楽科教育の目標にも掲げられているように、さまざまな音楽的な活動を通して、「心情」「感性」「能力」をお互いに関連させ合いながら育成することによって最終的には「豊かな情操を養う」ということに通じている。

音楽科教育には歌唱共通教材が設定されている。この歌唱共通教材は昭和33年に告示された学習指導要領（試案）から設定され現在に至っている。当時の文部省によれば、「児童に親しまれてきたもの、しかも家庭や社会で、親、兄弟やおとな、としよりとともに親しく歌えるなつかしいもの（p69）」という趣旨で選曲したと説明している。それ以降、現在に至るまで共

通教材は楽曲の変更は若干あるものの、各学年に3曲～4曲設定されているのである。

それら共通教材は、先ほど学習教材でも述べたように、我が国の伝統や文化、自然や四季の美しさや夢や希望を持って生きることの大切さなどを含んだ内容の楽曲であり、人々の生活や心情と深いかかわりを持ちながら、世代を超えて歌い継がれてきた歌であり、これからも歌い継いでいきたい歌として選曲されている。

音楽科教育と道德教育は道德性の育成において深くかかわっていると前述した。そこで音楽科における歌唱教材から読み取る道德性について考察していく。

小学校・中学校の歌唱共通教材として学習指導要領に設定された昭和33年度告示版から平成20年度告示版までを表2小学校、次ページ表3中学校にまとめた。

小学校は表2からもわかるように、55年間、曲数の変化はあるもののほとんど楽曲としては変化していないことがわかる。しかし、中学校の共通教材は表3に示しているように、昭和33年版から平成20年版までを見ると大きな変化がある。まず、前回の改訂（平成10年）においては、学校週5日制の導入と、「ゆとり」の中で特色のある教育を展開し、児童生徒に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を図ることを基本的なねらいとして、総合的な学習の時間が設けられた。その授業時数の確保のため音楽科の授業時数も削減されることとなった。その結果中学校における共通教材は設定されなかった。

表2 小学校 歌唱共通教材（昭和33年版～平成20年版）

学年	昭和33年版	昭和43年版	昭和52年版	平成元年版	平成10年版	平成20年版
第1学年	・かたつむり ・日のまる ・月	・かたつむり ・日のまる ・月	・うみ ・日のまる ・ひらいたひらいた	・うみ ・かたつむり ・日のまる ・ひらいたひらいた	・うみ ・かたつむり ・日のまる ・ひらいたひらいた	・うみ ・かたつむり ・日のまる ・ひらいたひらいた
第2学年	・春がきた ・さくらさくら ・雪	・春がきた ・虫のこえ ・夕やけこやけ ・雪	・かくれんぼ ・春が来た ・夕やけこやけ	・かくれんぼ ・春が来た ・虫のこえ ・夕やけこやけ	・かくれんぼ ・春が来た ・虫のこえ ・夕やけこやけ	・かくれんぼ ・春が来た ・虫のこえ ・夕やけこやけ
第3学年	・春の小川 ・もみじ ・汽車	・春の小川 ・もみじ ・村まつり	・うさぎ ・春の小川 ・ふじ山	・うさぎ ・茶つみ ・春の小川 ・ふじ山	・うさぎ ・茶つみ ・春の小川 ・ふじ山	・うさぎ ・茶つみ ・春の小川 ・ふじ山
第4学年	・赤とんぼ ・村のかじや ・子もり歌	・茶つみ ・村のかじや ・子もり歌	・さくらさくら ・とんび ・もみじ	・さくらさくら ・とんび ・まきばの朝 ・もみじ	・さくらさくら ・とんび ・まきばの朝 ・もみじ	・さくらさくら ・とんび ・まきばの朝 ・もみじ
第5学年	・こいのぼり ・冬げしき ・海	・こいのぼり ・冬げしき ・海	・子もりうた ・スキーの歌 ・冬げしき	・こいのぼり ・子もりうた ・スキーの歌 ・冬げしき	・こいのぼり ・子もりうた ・スキーの歌 ・冬げしき	・こいのぼり ・子もりうた ・スキーの歌 ・冬げしき
第6学年	・おぼろ月夜 ・ふるさと ・われは海の子	・おぼろ月夜 ・ふるさと ・われは海の子	・おぼろ月夜 ・ふるさと ・かりがわたる	・越天楽今様 ・おぼろ月夜 ・ふるさと ・われは海の子	・越天楽今様 ・おぼろ月夜 ・ふるさと ・われは海の子	・越天楽今様 ・おぼろ月夜 ・ふるさと ・われは海の子

（筆者作成）

削減された科目については新たに選択教科としてコースが設けられ、音楽科も幅広い音楽を生徒に経験させるというねらいをもって選択教科として位置づけられた。真に音楽の良さを生徒に味わわせるための教材は指導者自らが選曲するという自由度を高め、それらの教材に対しては、学習指導要領としての法的な拘束力は存在していなかった。

しかし今回の改訂（平成20年）では、中学校3学年を通して共通教材が再度復活してきている。共通教材として7つの楽曲が示された理由として、文部科学省（2008）は「わが国で長く歌われ親しまれている歌曲のうち、我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語の持つ美しさを味わえるもの」の観点から取り上げたものを歌唱教材に含めることとし、この観点到にふさわしい7曲を歌唱共通教材として示したと説明している。

また表3からわかるように、昭和33年度版・44年度版までは共通教材として多くの外国の楽曲も設定されていた。しかし、昭和52年度版の学習指導要領からは、外国曲は選曲されていない。それについて木村（1977）は、「歌唱の共通教材で現行（昭和42年）の教材の一部を除いて入れ替えをし、全曲とも日本の歌曲とした。趣旨は、日本の子どもたちが、いつどこで集まっても共に歌い、共に喜びあい連帯感を持たせるための共通の歌が必要であるとの意見からであった。（p174）」と述べている。そして、歌唱共通教材は全曲とも長年にわたる評価に耐えてきたもの、そして将来にわたっても名曲として歌い続けられるであろうと思われる日本歌曲を選曲したとのことであった。

当時の文部省において共通教材の選曲の条件として、ア、邦人の作品とする。イ、永く歌い伝えられ、今後とも国民に愛唱されると思われるもの。ウ、子どもたちにとって文化の享受と継承の体験がさせられるもの。エ、日本語の持つ美しさを味わえるものという4点が挙げられ

表3 中学校 歌唱共通教材（昭和33年度版～平成20年度版）

学年	昭和33年版	昭和44年版	昭和52年版	平成元年版	平成10年版	平成20年度版
第1学年	<ul style="list-style-type: none"> ・わかれ（ドイツ民謡） ・喜びの歌（ベートーベン） ・朝だ元気で 	<ul style="list-style-type: none"> ・わかれ（ドイツ民謡） ・赤とんぼ ・こきりこ節 ・子もり歌（シューベルト） 	<ul style="list-style-type: none"> ・砂山 ・赤とんぼ ・荒城の月 	<ul style="list-style-type: none"> ・花の街 ・赤とんぼ ・さくらさくら 	共通教材の設定はない	<ul style="list-style-type: none"> ・赤とんぼ ・荒城の月 ・早春賦 ・夏の思い出 ・花 ・花の街 ・浜辺の歌 （3学年を通してという設定）
第2学年	<ul style="list-style-type: none"> ・サンタルチア ・眠りの精（ドイツ民謡） ・荒城の月 	<ul style="list-style-type: none"> ・サンタルチア ・夏の思い出 ・斎太郎節（「大漁うたい込み」から） ・勝利をたたえる歌（オラトリオ「マカベウスのユダ」から[ヘンデル] 	<ul style="list-style-type: none"> ・浜辺の歌 ・夏の思い出 ・早春賦 	<ul style="list-style-type: none"> ・浜辺の歌 ・夏の思い出 ・荒城の月 		
第3学年	<ul style="list-style-type: none"> ・花 ・やしの実 ・こもり歌（ブラームス） 	<ul style="list-style-type: none"> ・花 ・かりぼし切り歌 ・故郷の人々（スワニー川） The old folks at home(The Swanee River)	<ul style="list-style-type: none"> ・花 ・椰子の実 	<ul style="list-style-type: none"> ・花 ・早春賦 		

（筆者作成）

ていたようであるが、それを基に選曲されたのが現行の共通教材のもとになっているのであろう。

現行の中学校学習指導要領（音楽編）には、歌唱共通教材の選択に当たって2つの観点が示されている。中でも「(ア) 我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又はわが国の文化や日本語の持つ美しさを味わえるもの」の観点として選曲されている歌唱教材は、生徒が豊かな自然や四季の美しさへのイメージを膨らませ、自然や環境に対する関心を導き、それらを尊重する態度を養うことにもつながるし、我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえる歌唱教材を扱うことによって、生徒は我が国の文化のよさを味わい、日本語の響きを感じ取ることができ、我が国の文化を尊重したり、日本語を大切にすることを養ったりする。(p34) と示されている。そして選曲された楽曲は日本人が作詞、作曲した日本歌曲であり、古くから歌い継がれている我が国の伝統的な音楽なのである。もちろん教科書に示されている歌唱教材としては、これ以外にも多くの楽曲が示されているし、共通教材以外の楽曲に関しては、出版社によって取り扱いが違っているが、外国曲も多く取り入れられている。

歌唱曲には歌詞という言語が旋律を媒介として、人間の心に伝えていくという働きを持っている。それは音楽を愛好する「心情」と「感性」を育成し、豊かな「情操」を養うという音楽科の目標と豊かな心を養うという道徳教育のねらいに一致するものであると捉えている。音楽の学習内容、とりわけ歌唱においては、歌詞を通して道徳性を養っているといっても過言ではない。

そこで、教科書に掲載されている音楽科の歌唱教材の歌詞から読み取れる道徳性を、表1による道徳教育の4つの視点を基に、道徳教育の内容に沿って分類することを試みた。教科書は、株式会社教育芸術社による小学校は平成23年度、中学校は平成24年度に出版されたものを使用した。

すべての教材が対象であるとはいえないが、それぞれの楽曲の歌詞を見てみると、中には自分自身のこと、自分と他の人とのかわり、さらには抒情的なものであったり、情緒的であったり、自然や生活に関連したもの、そして、集団や社会を歌ったものが多く取り扱われている。それらを抽出し、表4（次ページ）にまとめた。

歌詞の内容については、日本の曲にあってはできるだけオリジナルなもの(童謡、唱歌を含む)で、既にあったメロディーに作詞者が意図的に歌詞を付けたものは対象から外している。外国曲にあっては、日本語で付けられた歌詞(訳詩を含む)をもとに分類していった。

教科書には歌唱教材として、小学校1年生では40曲、2年生では37曲、3年生では32曲、4年生では29曲、5年生では29曲、6年生では28曲、中学1年生では18曲、中学2・3年生上では18曲、中学2・3年生下では16曲が掲載されてあった。そのうち筆者が道徳教育内容(表1参照)と関連していると捉えた教材(表4参照)は小学校1年生では20曲、2年生では16曲、3年生では13曲、4年生では12曲、5年生では20曲、6年生では21曲、中学1年生では12曲、

中学2・3年生上では13曲、中学2・3年生下では15曲あった。

このことから分かるように小学校高学年から中学校になるにつれて、道徳的な視点に立った楽曲の割合が多くなり、その内容は他者との関わりや、自然や崇高なものとの関わりの道徳教育内容②、③にかかわっているものが多い。これは児童生徒の発達段階を考慮して、より情緒的・抒情的なものを扱うことで、人間のあり方や、よりよい生き方をめざす人格的特性をねらったものだと捉えている。

表4 道徳教育の内容と音楽科の歌唱教材の関わり

	道徳教育の内容	①自分自身に関すること	②他の人とのかかわりに関すること	③自然や崇高なもののかかわりに関するもの	④集団や社会とのかかわりに関するもの
音楽教材	小学校第1学年	ちようちよう、ぞうさん こいのぼり	チューリップ、さんぽ 森のくまさん	うみ、ぶんぶんぶん きらきらぼし、たなばたさま はるなつあきふゆ そろそろはるですよ	めだかの学校、ちきゅう広場 ひのまる、じゃんけんぽん しろくまのジェンカ、お正月 とんくるりん ばんくるりん
	小学校第2学年		かくれんぼ、はしの上で たぬきのたいこ 海とおひさま、子ぎつね、 手のひらを太陽に	虫の声、タやけこやけ、夕日 はるがきた、ぶつかりクジラ こぐまの2月、はるのまきば あの青い空のように	メッセージ、会えてよかった
	小学校第3学年	歌おう声高く 七つの子 ちびっこカウボーイ	帰り道	春の小川、茶つみ、うさぎ ふじ山、海風きって あの雲のように	一人の手、友達 きょうりゅうとチャチャチャ
	小学校第4学年	せいくらべ	歌のにじ、子どもの世界 風のカーニバル いつだって	とんび、まきばの朝、もみじ さくらさくら、風のメロディー、 みかんの花咲く丘、	つるの恩返し
	小学校第5学年	待ちぼうけ 月の見えない夜は	子もり歌、まつり花 走れメロス、ビリーヴ 僕にできること 世界が一つになるまで 明日に向かって 歌に願いを 南風につけて	こいのぼり、冬げしき、アリス スキーの歌、それは地球、海	だれかが口笛吹いた A good day 大空がむかえる朝
	小学校第6学年	明日という大空 燃え上がれ！、 街は光の中に すてきな自分と出会う道 この星に生まれて あおげばとうとし つばさをください、	広い空の下で 思い出のメロディー さよなら友よ、さよなら 風にのせて 旅立ちの日に	おぼろ月夜、われは海の子 ふるさと、越天楽今様 星空はいつも、星の世界、花 銀河鉄道の歌、浜千鳥	
	中学校第1学年	きっと歌える、星座	カリブ夢の旅 unlimited、風と てのひら、マイ バラード、青春の1ページ	Foever、浜辺の歌、赤とんぼ、ふるさと	Foever、 Let's Search For Tomorrow
	中学校第2・3学年上	翼をください、さくら草、 朝、心の中にきらめいて	夢の世界を、大切なもの 今日は君のBirthday	そこに風がいる、夏の思い出 荒城の月、花の季節 さくら草	時の旅人
	中学校第2・3学年下	青空、上を向いて歩こう 仰げば尊し	L-O-V-E 自由への讃歌 旅立ちの日に、	花、風の中の青春、花の街 帰れソレントへ、早春賦 名づけられた葉	たったひとつ、いつまでも 大地讃頌

(教育芸術社 小学校平成23年度・中学校平成24年度教科書より 筆者作成)

もちろん楽曲だけで道徳性が育成されるとはいいいきれない。音楽科は道徳教育とのかかわりの大きい教科の1つではあるが、道徳性はあくまでも教科学習を通して培われていくものである。音楽科教育の学習内容や方法は重要な要素となる。集団で学習するといっても、形態はさまざまである。同じメロディーを全員で一緒に演奏する斉唱や斉奏もあれば、パートに分かれて演奏する合唱や合奏もある。時にはグループで一つの作品を作り上げていくという活動もある。要するに音楽科は、学習活動、学習内容、授業形態などにおいても、道徳的内容を備えた教科であるといえる。

5 音楽科教育における道徳性の育成

J. L. マーセル（1975）は、「教育における音楽の道徳的影響は、それがどのように教えられ、どのように学ばれるかにかかっている。音楽は立派な人間とよい社会を作るのに役立ってこそ、教育における道徳的な力となり得る（p.135）」という。

要するに音楽の道徳的価値は音楽をどう扱うかによって決定されるのである。それはひとえに教育に携わる教師がどのように音楽を用い、どのように児童・生徒に伝え、どんなことを学ばせるかを周到に計画し、実践することにかかっている。

またマーセルは、「非常に不道徳な人でも、音楽に積極的に興味を持っている瞬間は、全面的に悪人ではないといえる。音楽を好むということが、一つの特性といえる。音楽に対する興味が、人間生活の立て直しのきっかけになるかもしれない（p.154）」ともいう。

音楽は美しいものを味わい、美しいものの中に身を置き、美しいものを作り出し、感情を伝達し、人に感動を与えていく、これは音楽の力であり、音楽が道徳的な力を持っているということにつながる。しかし、音楽が道徳的な力になるといっても、音楽を過信することなく、音楽によるさまざまな経験を積ませることとその使い方を、指導者はしっかり把握しておく必要がある。道徳的価値が生かされるか否かは、音楽をどのように扱うかによって違ってくる。

「歌唱」や「器楽」分野における合唱や合奏の学習活動は、道徳性の育成に深く関わっている。それは、人と人とのかかわりを通して培われる協調性や共感性を身に付けるだけでなく、一人ひとりの自覚や責任感も求められるのである。

また、国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、音楽科教育には、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着を持つとともに、他国の音楽文化を尊重する態度を養うという目標がある。

古くから「音楽には国境はない」といわれているように、自国や他国のさまざまな音楽を聴いたり演奏したりすることによって、他国の音楽文化を尊重する態度等を養い、諸外国に対する親しみや理解を深めていくということにもつながる。さらには我が国の音楽文化を見直すきっかけにもなり、その文化に愛着をもつことにもなる。そして結果的にはそれらのことを通して多文化・異文化理解にもつながり、国際理解の分野にまでも広がりを見せる。また、歌唱

活動においては、歌詞という言葉を通して、見えないメッセージを人の心に伝えることもできる。自然や崇高なものを表現している情緒的な歌詞が多いのもそれらを意図していると捉えるのである。

もちろん学校教育の実践において、指導者が意図してこのような情緒的な曲を選曲するということも多く、道徳的価値を盛り込んだ教材を選択し、それを学級や学年、学校経営に生かしているということも伺い知ることができるのである。

音楽は、授業だけにとどまらず、さまざまな学校行事にも関わることが多く、1教科としての位置づけというよりも、学校教育全般にかかわるほど大きな影響力を持っているともいえるのである。それは先に述べたように、児童・生徒の気持ち（心）を代弁する働きや機能を持ち、児童・生徒の心身の安定を促すことにも通じるからである。そのことは豊かな人間性を育み、音楽科教育が道徳性の育成に大きくかかわっている教科であるということの証なのである。

6 おわりに

道徳教育は学校教育活動全体を通して行われるものといわれているが、音楽科教育は目標そのものが道徳性の育成につながっている。また、音楽科教育の歌唱・器楽・音楽づくり（創作）・鑑賞の活動領域は、学習活動そのものが、道徳性の育成に大きくかかわっているといえる。しかし、音楽科教育は道徳性の育成だけにあるものではない。学習の過程で習得されていく多くの能力が、道徳性の育成につながっているということなのである。

指導者は、音楽科教育を通じてどんな人間を育てていこうとしているのかをしっかりと踏まえ、また児童・生徒の実態をしっかりと把握した上で、児童・生徒が音楽に積極的にかかわれるような魅力ある授業づくりに取り組むことが求められる。発達段階に応じた教材選択や学習活動、さらには音楽を楽しむ環境を作っていくことも教師の責務となるのである。

音楽の教育的、道徳的価値は、音楽を用いて何をするかによって変わってくる。その用い方によっては道徳的価値観や教育的価値観を左右するものにもなる。人間関係の希薄化、コミュニケーション能力の低下等、現代社会はさまざまな課題を抱えている。その課題の克服に向けて、音楽科教育はその存在価値を十分に発揮し、教育的価値を見出せる教科になり得るものであると考えている。

音楽科は学校教育においては1教科にすぎないが、道徳性の育成を目標とする教科であることはゆるぎない事実である。人間生活にとってなくてはならない音楽を学校教育に位置付け、その目標を達成していくことはまぎれもなく道徳性を育成することにつながっているのである。そして音楽科教育は、教育的、道徳的価値に基づき、音楽を媒体にして、心豊かな人間の育成を目指すものであり、道徳性の育成に関わっている教科なのである。

引用・参考文献

- 市川須美子 他編（2008）教育小六法（平成20年度版）学陽書房
- 押谷由夫（2013）「道德の教科化をめぐる」日本教育新聞 4月1日
- 日本教育新聞 社説（2013）「道德教育見直す契機に」 3月11日
- 文部科学省（2008）学習指導要領（小学校・中学校） 東山書房
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説（道德編）東洋館出版社
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説（道德編）日本文教出版社
- 村田昇（2011）道德教育の本質と実践原理 玉川大学出版部
- 文部科学省（2008）小学校・中学校学習指導要領解説（音楽編）教育芸術社
- 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説（芸術編）教育芸術社
- 文部科学省（1967）小学校音楽指導書 教育出版
- 木村博文（1977）改訂中学校学習指導要領の展開 教育芸術社
- 文部省（1977）小学校指導書（音楽編）教育芸術社
- 小原光一 他監修（2011）小学生の音楽 1～6 教育芸術社
- 小原光一 他監修（2012）中学生の音楽 1、2・3上下 教育芸術社
- J. L. マーセル著 美田節子訳（1975）「音楽教育と人間形成」音楽之友社
- 小林多津子（2012）道德性発達研究 第7巻 第1号「道德教育と音楽科教育とのかかわり」
- 岩佐信道（1992）道德性心理学 第4章認知的発達理論 北大路書房